

保育一元カリキュラムから指導計画を考える

幼保連携型認定こども園の指導計画

Consideration of teaching plans based on the joint curriculum for kindergarten and
nursery school

Teaching plans for the Center for Early Childhood Education and Care

小熊 真弓

Mayumi OGUMA

キーワード：幼保一元カリキュラム 指導計画 幼保連携型認定こども園

1. はじめに

2015年4月に子ども子育て支援新制度が施行され、自治体には子育て中のすべての家庭を支援することや認定こども園の改善を図ること、多様な保育の確保により待機児童の解消に取り組むこと、地域の子育て支援を充実することなどが課せられた。

これまで幼児期の教育を行うのは「幼稚園」、教育を含めた保育については「保育所」と、それぞれの施設において幼稚園教育要領、保育所保育指針に則り教育や保育が行われてきた。子どもを預ける施設は、主に保護者が就労している場合は保育所、保護者が就労していない場合は幼稚園と、保護者のニーズにより選んでいた。その後、幼保連携型認定こども園が学校および児童福祉施設として法的に位置づけされたことで、保護者の就労の状況に関わらず0～5歳児が、同じ施設で教育や保育を一体的に受けることができることとなった。今まで保護者が仕事を辞めると保育所を辞めなければならなかったり、就労することになると幼稚園を辞めなかったりすることがあったが、こども園では保護者の働き方が変わっても卒園するまで同じ施設で過ごすことができる。子どもにとっても保護者にとっても、環境が変わることなく継続して園生活を過ごすことができるので、いずれ働くことを視野に入れている保護者にとってもニーズに合い選択する

要因の一つとなっている。

2014年に告示された「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」では、教育及び保育の基本の中に、乳幼児期における教育及び保育は、子どもの健全な精神の発達を図りつつ生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものであり、幼保連携型認定こども園における教育及び保育は、就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律（認定こども園法）に規定された目的を達成するため、乳幼児期の特性及び保護者や地域の実態を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とし、家庭や地域での生活を含め園児の生活全体が豊かなものとなるように努めなければならないとされている。これらを踏まえて、それぞれの園ではすでに行われている教育課程や指導計画を見直しながら更に質の高い教育・保育を実施することを課題として取り組んでいる。

習志野市には2017年に幼稚園と保育所を統合した公立こども園が3園あり、更に2019年4月に2園が開園し5園となった。

1園目のこども園が開園した際に幼稚園と保育所の教育や保育を一体的に進めるために、幼稚園、保育所、こども園と市の担当課により「就学前保育一元カリキュラム」を作成し、必要に応じて改訂を実施してきた。

こども園ではそれまで2年保育であった短

時間児（2号認定）を2019年度から新たに3年保育とするため、前年度より新3歳児の保育一元カリキュラムの検討がなされてきた。そこで、保育一元カリキュラムを基本としたこども園の指導計画を考えてみることにする。

2. 保育一元カリキュラムに込められた内容

習志野市では市内公立幼稚園、保育所、認定こども園において就学前保育一元カリキュラムを作成している。市内で統一して作成したカリキュラムには、同じ地域に住む子どもたちがどの施設に在籍していても等しく同じ内容の教育・保育を受けることができるという理念が込められている。このカリキュラムに則って各施設が教育・保育を一体的に行うことにより、就学前の子どもたちに質の高い教育・保育を実施することができる。その結果同じ地域の小学校に就学する1年生は、地域や教育に格差のない状態で小学校生活をスタートさせることができる。更に、幼保小連携教育も長く進められており、就学前施設（幼稚園、保育所、こども園）と小学校の連携に保育一元カリキュラムは重要な役割を担っている。

（1）就学前保育一元カリキュラムの理念

保育一元カリキュラムの理念には次の3点が述べられている。

- ①すべての就学前の子どもたちの人権を尊重し、保育所・幼稚園、こども園が家庭、地域と共同して「子どもたちが、基本的安全感、健康で文化的な生活、豊かな遊びを保障されて、心身の調和のとれた発達をし、健全な人間形成の基礎を培う」ことを実現する。
- ②保育所・幼稚園・こども園と家庭、地域とが「子育てパートナーとして互いに信頼し、子育ての場を共有し、子育ての情報を交換し、相談し、交流することによって、子どもを中心に様々な体験をする」ことを実現する。
- ③保育所・幼稚園・こども園が、家庭、地域の参画、参加を得ながら、「安全な環境、確かな保育、オープンな運営を目指

すことによって信頼され、子育てにおいて安心できる地域の中核的専門機関となる」ことを実現する。

（2）教育・保育計画

それぞれの地域性や施設の設置状況、子どもや保護者の状況等に応じた計画でなくてはならないことに鑑みて、項目を共通化して各施設の教育・保育計画書が立案することを示している。

（3）指導計画の考え方

乳幼児の発達の特性を考慮して、2歳未満児については、月齢別指導計画、2歳児から5歳児までは期別指導計画とした。

・月齢別指導計画

発達のみちすじに沿った指導計画である。子どもを個として捉え、その月齢に応じた望ましい保育の在り方や育てるべき姿をねらいとしてつくられた計画となっている。

・期別指導計画

2歳以上の子どもが集団としてクラスを中心とした生活や活動を展開していくための計画となっている。

0歳児から1歳児については、個の発達に応じた保育が基本となるため、月齢別指導計画を指導計画とする。

2歳児については、年齢としては個が基本となるが、成長過程の中で小集団としてクラス保育が可能となってくることから、期別指導計画についても立案している。各施設の子どもの状況によって、月齢別指導計画と期別指導計画のどちらかを選択する。

3歳児以上については、個を基本としながらもクラス保育が主になることから期別指導計画とする。

評価については次のように考える。

- ・保育を振り返り、その保育の過程を反省・評価し、次の指導への改善・予測を確かなものにしていくことができるようにする。
- ・ねらいは子どもの活動にふさわしいものであったか。
- ・内容についての活動計画は適切であったか。活動については、子どもたちが主体的

保育一元カリキュラムから指導計画を考える

に取り組めたか。

- ・養護については、子ども一人一人の発達を捉えて援助できたか。特に基本的生活習慣の形成状況はどうか。
- ・子どもの姿はどうだったか。一人一人の子どもについての理解は十分か。
- ・環境構成については、素材や遊具は適切であったか。子どもの活動について適切な援助ができたか。
- ・保育者同士の共通理解と協力体制はどうであったか。
- ・地域や家庭との連携、保護者との信頼関係について一人一人に視点を当てて考える。

3. 指導計画作成における留意点

幼保連携型認定こども園教育・保育要領には、指導計画の考え方として次のように述べられている。

幼保連携型認定こども園における教育及び保育は、園児が自ら意欲をもてて環境と関わるによりつくり出される具体的な活動を通して、その目標の達成を図るものである。

幼保連携型認定こども園においてはこの考えを踏まえ、乳幼児期にふさわしい生活が展開され、適切な指導が行われるよう、調和のとれた組織的、発展的な指導計画を作成し、園児の活動に沿った柔軟な指導を行わなければならない。

そこで指導計画作成に当たっては、保育一元カリキュラムを主としながら次の点について考慮して園独自のものを作成することが大切であると考えます。

①乳幼児期の発達の特性を踏まえること

0歳から就学前までの発達を踏まえ、園児一人一人にふさわしい生活が展開されるようにすることで発達が促される。

②地域社会との関りを考慮すること

地域社会との連携を大事にして、地域の人々や文化などを取り入れていく。園が地域の力を借りたり、園児と地域の人々が交流したりすることにより、その地域で育つ子どもたち及び保護者が豊かな生活体験

をできるようにする。

③一人一人の実態に応じた計画の立案

こども園では保護者の保育の必要性により乳幼児が入園する年齢や時期がそれぞれ違う。幼児組では1号認定の子どもたちが集団生活を始める時期には多く幼児が入園してくるので、継続児や転入児など多様な生活経験の幼児が園生活を送る上で、特に配慮が必要である。

これらのことを考慮した上で指導計画を立案することが大切である。

4. 3歳児の指導計画

2019年度から習志野市立幼保連携型認定こども園では、それまで短時間児（1号認定）の幼児は2年保育であったが、3年保育となり3歳児から入園できるようになった。

2018年度までは、3歳児は長時間児（2号認定）のみであったため、4月当初の指導計画では継続児と新たに他の保育所・こども園からの転入児及び3歳で初めて長時間児として入園してくる新入園児が共に生活をする際の配慮事項を考えた内容であった。しかし2019年度は新たに短時間児が入園してくることになるため、4月当初の一人一人の生活経験の差を考慮した指導計画を立案することが必要となった。

そこで、前年度までの指導計画を見直し新たに新入園児の実態を考慮し、4月から5月にかけてのねらいや配慮事項を加えていくこととした。

ねらいについては、子どもの発達や特性を理解した上で、生活を通して子どもに育んでほしい資質、能力と考える。また、内容については、ねらいを達成するために、子どもに経験してほしいことと考える。

ここに取り上げた幼保連携型認定こども園はの3歳児2クラス合わせて長時間児24名、短時間児22名、合計46名の内訳は次のようになる。2歳児（1学級）から進級した3園児が14名、他の施設から転入してきた園児が5名、新入園した長時間児が5名、新入園した

短時間児は22名である。

＜2019年度3歳児第1期4月～5月＞

子どもの実態

- ・新入児は、保護者と離れることへの不安を感じ、したいことやしてほしいこと、思ったことなどを言葉で十分に表現できず、泣いたり怒ったりして訴えようとする姿が見られる。
- ・進級児は、進級した喜びで気持ちが弾んでいる半面、環境が変わり、更に新しい友達が増えたことによって落ち着かない様子が見られる。
- ・新しいクラスでの生活（排便、手洗い、所持品の始末など）について、環境の変化に戸惑いが見られる。
- ・友達と一緒にいながら、一人遊びをしたり、並行遊びをしたり、時には友達と触れ合いながら遊んだりする。

ねらい

教育

- ・園生活の流れを知り、喜んで登園する。
- ・保育者やに不安や欲求を止めてもらいながら親しみをもち、新しい環境に慣れる。
- ・園の遊具や玩具に興味をもち、自分の好きな遊びを楽しむ。

養護

- ・ゆったりした雰囲気の中で、一人一人の気持ちを受容し、情緒の安定した生活ができるようにする。
- ・午睡など、適切な休息を取り、心身の疲れを癒して、集団生活による緊張を緩和する。

内容

- クラスの担任や友達が分かり、親しみをもち。
- ・保育者との触れ合いを通して、園生活に少しずつ慣れる。
- ・保育者のそばにいたり一緒に遊んでもらったりすることで安定する。

- ・保育者や友達と一緒に遊ぶ。
- 保育者の手助けにより、食事、排泄、手洗いなど基本的な生活の仕方を知る。
- ・身の回りのことを保育者と一緒に行おうとする。
- ・自分の印（マーク）を知り、自分の所持品の場所や食事の席（位置）が分かる。
- ・自分の席が分かり、決まった場所で友達や保育者と一緒に食事をする。
- ・安心して午睡ができるようになる。
- ・遊んだ後の片付けを保育者と一緒にする。
- 毎日の生活の中で簡単な挨拶をする。
- 好きな遊びを楽しむ。（ままごと・砂遊び・積み木・ブロック・粘土など）
- 保育者や少人数の友達と一緒に追いかけてこやわらべ歌遊びをする。
- 保育者に絵本を読んでもらったり、友達と一緒に紙芝居を見たり話を聞いたりする。
- 音楽に親しみ、聞いたり、歌ったり、体を動かしたりする。
- 固定遊具や砂場、三輪車などの遊具の使い方や遊び方を知る。
- 飼育動物や植物の様子に興味をもったり、保育者が世話をする様子を見たりする。

環境構成及び援助と配慮

- ・施設内の保険的な環境に十分留意し、快適に生活できるようにする。
- ・一人一人の子どもの健康状態や、発育・発達状態を把握し、いつもと違うと感じる場合は速やかに適切な対応をする。
- ・安定した生活ができるように、家庭との連携を図っていく。
- ・食事は摂取量に個人差が生じ、偏食が出やすいので、一人一人の心身の状態に応じて量を加減するなど、無理なく楽しく食事が摂れるようにする。
- ・子どもの気持ちを温かく受け入れ、優しく言葉掛けをするなど保育者と一緒

保育一元カリキュラムから指導計画を考える

にすることで、安心できるような関係をつくる。

- ・経験の差が大きいことや多人数であることを考慮し、実態に応じて少人数に分かれたり保育者間で連携を図り、個々に対応したりするなど工夫し、情緒の安定を図る。
- ・自分の場所が分かるように靴箱などに印（マーク）を付け、安心して持ち物整理ができるようにする。
- ・一人一人の好きな遊具や発達に合った遊具を十分用意し、保育者と十分に触れ合える時間や場を保障する。
- ・好きな遊びを見つけられるように一緒に遊んだり、遊びに目を向けられるように誘ったりする。
- ・生活の仕方や必要なきまりを丁寧に伝えていく。
- ・新入園児だけでなく、進級児の不安も受け止め、これまで好んで遊んできた玩具や興味のある玩具を用意するなどして安心して遊べるようにする。

主な活動

- 戸外遊び 体操・固定遊具・砂遊び・三輪車・虫探しなど
- 室内遊び ブロック・プラレール・粘土・のり・描画・ままごと・絵本・塗り絵・紐通しなど
- 集団遊び あぶくたった、おおかみさんなど
- 制作 こいのぼり
- 自然との関わり 花壇の草花を見る、虫探しなど
- 歌・手遊び こいのぼり、ぶんぶんぶん、せいいせいとおともだち、あおむし、はちべえさんとじゅうべいさん、ぱんやさん、おべんとうばこ
- 絵本 はらぺこあおむし
- 体操 アンパンマン体操、エビカニクス、サンサン体操など

家庭との連携

- ・環境の変化により心身の疲れが出やすい時期なので、1日の様子をできるだけ細かく知らせると共に、家庭でゆったり過ごすことができるように伝える。
- ・保護者の不安な気持ちを受け止め、安心感がもてるようにする。
- ・懇談会や送迎時に子どもの様子を伝えると共に、家庭での様子を聞き保護者の気持ちを受け止めながら信頼関係を築いていく。

5. 評価

新入園児が入園し、指導計画に沿って短期計画（週日案）を立案し実践した結果、次のことが分かった。

(1) 子どもの実態について

- ・新入園児（短時間児）は、園生活が始まりそれまで過ごしていた家庭生活からの環境の変化に対して不安になる様子が見られるとと捉えていた。実際には朝保護者から離れる際に不安そうな様子や保育中に保護者を思い出して泣く様子などが見られた。しかし、園生活の喜びや楽しさを感じるようになると、予想したよりも早い5月には、園生活に慣れて自分で遊びを見つけて取り組む様子が見られた。
- ・2歳から継続して進級した長時間児は、それまで1クラスだったが2クラスにに分離したり、保育室が2階に変わったりするなどして環境の変化に戸惑うことが予想された。実際には、それらの不安の他に、短時間児が降園する様子に戸惑ったり自分も帰りたいたいと不安になった利する姿が見られた。そこで短時間児の降園の際の分離の仕方を配慮し長時間児が午後の時間を落ち着いて過ごすことができるようにした。

(2) ねらいについて

- ・4月～5月は「生活の流れを知り喜んで登園する」としたが、実態から考えるとやや高かったので「安心して登園する」に変えるとよい。

(3) 内容について

- ・登園時や降園時の活動については、5歳児（年長組）がやり方を教えたり、2階から園庭に降りる手伝いをしたりした。5歳児が3歳児とペアになり丁寧に関わってくれることで、3歳児は安心感をもつことができた。また、5歳児にとっても自分の力を発揮したり、年下の子どもに優しくしよう、手伝ってあげようという気持ちをもつことができ、自立心や人と関わる力の育ちにつながった。

(4) 環境構成及び援助と配慮

- ・生活の仕方や固定遊具のルールなどの決まりを知らせる際は、言葉に加えて、絵カードや写真などの視覚教材を用いたことで、より理解につながることが分かった。

(5) 家庭との連携について

- ・生活面では、着替えを一人で行うことが難しかったので、家庭に協力してもらい共に進めることで、すぐに一人でできるようになった。園生活だけでなく家庭に実態を伝えて一緒に教えていく家庭との連携が大切である。
- ・食事については、給食に慣れるには時間を要する。特に短時間児は起床時間や家を出る時間などが長時間児とは違い、給食への意欲も個人差があるので個々の実態に応じた援助を行うことが大切である。給食に慣れている長時間児の給食の準備や待つときの様子は、短時間児には大きな影響がある。すでに身につけている友達が見本となり大きな刺激になっている。

6. まとめ

(1) 担任との信頼関係づくり

初めて短時間児の3歳児が入園し、それまでのクラスが2つに分かれたり先生や保育室などの環境が変わることは、長時間児にとって大きな変化であった。4月1日の進級時から短時間児や新入園児が入園してくる入園式までの日々は、長時間児は新しいクラスの先生や友達とじっくりと過ごすことができる期間である。決して多くはないこの日々(約10日間)を、担任は一人一人と丁寧にに関わり信頼関係

をつくれるような配慮を大事にしていく。また、長時間児の保護者とも個人の連絡ノートで子どもの様子を伝えたり、保護者の思いを把握したりするなどして信頼を得られるような配慮が大切である。

(2) 環境

環境面では、日々生活する保育室や長時間児だけが過ごす時間帯の保育室、預かり保育での保育室の使い方などは、子どもの心身の安定を重視して環境を考慮することが必要である。短時間児と長時間児の分離の際は、特に子どもが不安にならないような分離の仕方が必要となる。保育室の位置や建物の構造からも、子どもの動線を考えた分離を考慮し安心して生活できる環境を整える。

(3) ねらいについて

こども園では、養護と教育を一体的に進めているが、指導計画において養護と教育をどのように表すのかについての検討が今後必要である。それぞれをねらいに書き入れて分けているところもあるが、養護は保育者が配慮すべき事項として捉え、ねらいは育みたい資質・能力の3つの柱を育成することを基本に考えると整理されてくる。

3歳児の指導計画から乳幼児期にふさわしい教育・保育が展開されるための指導計画をどのように見直したらよいかに取り組んだ結果、こども園では入園の時期が個々により違いがあることから、一人一人の生活経験や実態を考慮した環境構成や保育者の配慮が必要であることが明らかになった。反省したことや評価を生かして指導計画に修正を加え、年度末には次年度の計画が作成できるようにすることが課題である。

保育一元カリキュラムに沿って指導計画を見直すことは、質の高い教育・保育を行うためのベースとなる。子どもの育っている力、これから育てていきたい力を明らかにして乳幼児期にふさわしい生活が展開され適切な指導が行われるための指導計画が大切である。子どもの実態を見極め活動に沿った柔軟な指導

保育一元カリキュラムから指導計画を考える

ができるような指導計画の立案・実践・評価・
修正案の作成を園全体で取り組んでいくこと
が大切である。

引用・参考文献

習志野市就学前保育一元カリキュラム
習志野市立袖ヶ浦こども園指導計画
幼保連携型認定こども園教育・保育要領

謝辞

本研究を進めるにあたり、調査に協力して
くださった習志野市立袖ヶ浦こども園の先生
方に記して感謝申し上げます。